

いのちの終わりは、いのちのはじめ

イースターおめでとうございます。この朝私たちは、イエス様のご復活をお祝いするために集まってきました。今年、礼拝後、8 名という大勢の方の納骨式を執り行わせて頂くので、ご関係の方が多くお見えになっており、初めてお会いする方も多いかと思いますので、今朝は、自己紹介させて頂きながら私の経験を通して御言葉をお話させて頂きます。

私は昨年 3 月に9年間のドイツでの宣教を終えて、京都復興教会の協力牧師としてお招き頂き、今年度は主任牧師として立たせて頂いています。殆どの方はご存知ですが、私は子どもを亡くしたことがきっかけで、イエス様を信じるようになりました。

1. イエス様との関係から頂く命

子どもの「死」を通して「死ぬ」ということは、全てが終わったという喪失感に苛まれ、嘆き悲しみ苦しみました。お墓という場所は私の人生の終着点となりました。本日の聖書箇所に記載されているように、イエス様が十字架上で苦しまれ、息を引き取られた後、週の初めの日の明け方早く婦人たちは、イエス様が収められた墓に向かいましたが、そこにはおられません。途方に暮れているマリアたちに「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」(5～6 節)と、記されています。

イエス様は十字架上で、死んだ方ではなく、復活して生きておられる方だからお墓にはおられないと語られています。周りの者たちが嘆き悲しんでいる時、イエス様は暗闇の墓の中でうずくまっているのではなく復活されて、既にその先に向かって進んでおられたのです。

私たちがいつの日か迎えるこの世の死というものは、イエス様との関係からみるならば、お墓の前で嘆き悲しんで途方に暮れる必要はないと、聖書は示しています。この世の命だけに固執するのではなく、イエス様は復活されたという宣言によって、私たちも「新しい命」の始まりがあるのです。神様と共に歩む天の御国での命に目を向ける幸いを覚えないものは、

このことを信じるならば、死を超えた復活、蘇りの命がある、という希望を私たちも見出すことができます。私はそこまで到達するには、つまりこの世での死という終わりの命は、イエス様から頂く復活の新しい命を頂くことができるという事を理解し信じるには時間を要しましたが、求めてゆく中で確信を得ることができました。今の私はイエス様から頂く新しい命が希望となり、天の御国で子どもと再会できる日を楽しみにしています。

しかしながら復活とは、実に神秘であります。私たち自身が経験したことがないこと、人間の知識では到底考えられないことですが、世界中で2000年以上も語り告げられ、イエス様のご復活をお祝いしていることも、更なる神秘だと思われています。

ドイツにいた時の話です。ドイツはキリスト教国ですから、イースターの日には朝からテレビやラジオで讃美歌が流れ、教会でのイースター礼拝がテレビ放映されます。所謂、日本でいう NHK でも各国の礼拝のライブ配信をしています。そして欧州ではこの時期はイースター休暇となり、バカンスに出かける人々が多くなります。日本では感じることはできませんが、そのように世界規模でお祝いしているのがイースターです。そのこと自体もまた奇跡だと思います。

2. 神のみが知る命の終わりとは命の始まり

本日の説教題は、「いのちの終わりはいのちの始め」とさせて頂きましたが、讃美歌からとった説教題です。命の終わりは初めの一步であります。翻っていうなら、この命が終わらなければ、新しい命は始まらないということです。終わりは悲しみや絶望ではなく、実に希望なのであります。そのことが歌われている「球

根の中には」という感慨深い讚美歌を紹介いたします。

① 球根の中には 花が秘められ さなぎの中から いのちはばたく 寒い冬の中 春はめざめる
その日、その時を ただ神が知る

② 沈黙(ちんもく)はやがて 歌に変えられ 深い闇(やみ)の中 夜明け近づく 過ぎ去った時が 未来
を拓(ひらく) その日、その時を ただ神が知る

③いのちの終わりは いのちの始め おそれは信仰に 死は復活に ついに変えられる 永遠の朝
その日、その時を ただ神が知る

先ほども申し上げたように、本日は教会の納骨堂・復活の丘において 8 名の納骨式・分骨式が行われます。この世の旅路を精一杯生き抜いた方々がイエス様のご復活の命を頂いて新しく歩み始めるのです。

3. 空の墓の意味

私たちクリスチャンはそのようなイエス様を信じているのです。教会が毎年イースターを祝っていることは、このようにイエス様は墓に留まっておられることなく、そこから歩み出され生きておられる方であると信じているということです。その事が意味することは、私たちが「もう終わりだ」と思った所を始まりに変えてくださるという事です。先ほど、ご紹介した讚美歌は、正にイエス様の死は私たちの命の始めだったのです。

もう終わりだと思った墓でイエス様は私たちを受け止めてくださるのです。ですから私たちもまた生きることができるのです。そうして私たちの墓は終着点ではなく、スタート時点と、希望の時点となるのです。「ここにはおられない。復活なさったのだ」と、イエス様は私たちに語ってくださっています。今年もこの言葉を聞きながら、世界中の教会と共にイエス様のご復活を祝いしています。

またドイツの話で恐縮ですが、ドイツにいた頃、大きな集会に参加した時、聖餐の恵みを受けました。パンとブドウ液をお隣の方に順繰り廻してゆく方法なのですが、その時、「確かにイエス様は蘇られた」といって、パンとブドウ液を渡していきます。復活のイエス様を喜び分ちあいました。そうして、イエス様は復活されて、今も生きておられると、共に信仰を言い表した感動は忘れません。

イエス様のご復活された朝は「週の初めの日、日曜日でした。それゆえに私たちも日曜日に神に礼拝を捧げています。そのようにして復活され、生きておられるイエス様、そして私たちを生かしてくださるイエス様に繋がって生きていくのです。イエス様が十字架で全てが終わったのではなく、その先に栄光の姿があったように、私たちもこの身体をもって生きた一生は死をもって終わるものではありません。神が栄光の姿によみがえらせてくださいます。神によって生かされる私たちです。いのちの終わりはいのちの始めなのです。